

「くらべて楽しむ琳派作品」展によせて

くらべて楽しむ「伊勢物語図色紙 六段芥川」

俵屋宗達は、「琳派」の流れのはじめに位置づけられる絵師で、桃山時代末から江戸時代初期にかけて京都で活躍しました。慶長年間(1596～1615)頃より、扇面画や料紙装飾など、紙製品のデザインを手がける絵屋「俵屋」を営み、工房を主宰していたと考えられています。元和年間(1615～1624)には養源院の障壁画を制作、寛永7年(1630)には後水尾院のために屏風三双を制作するなど、本格的な絵師としても活躍するようになりました。

宗達の工房による作品で、まとまった数が残されているのが、『伊勢物語』に取材する色紙です。益田孝旧蔵の三十六枚、益田たき子旧蔵の四枚をはじめ、計五十九枚が現在知られています。署名や印章はありませんが、画風より宗達工房が手がけたものと考えられています。五十九枚の中には同じ章段の同じ場面が重複して描かれるものもあるため、何セットかの伊勢物語図色紙が制作されていたことが窺えます。本稿では宗達工房の伊勢物語図色紙のうち、益田孝旧蔵で現在大和文華館が所蔵する「六段芥川」の色紙(図1、以降、本色紙と記述)を取りあげ、様々な作品とくらべることで、その特徴を見ていきたいと思います。

本色紙には、男が長年思いを寄せていた女を夜に連れ出し、芥川まで来たところ、女が草に宿る露をみて「あれは何?」と尋ねる場面が描かれています。宗達は、鎌倉時代頃に制作された「異

本伊勢物語絵巻」(原本は所在不明、江戸時代後期の狩野晴川院養信による模本[図2]が東京国立博物館に所蔵される)の図様をしばしば取り入れており、本色紙においても「異本伊勢物語絵巻」を参考としたことが知られています。草が生い茂る川のそばで男が女の声に振り返り見つめ合うという図様を取り入れていますが、くらべてみると、相違もよく窺えます。川は、橋を省略し、ウネウネと蛇行する形状を改変し、水平、斜め、水平、斜めと相似形を繰り返す形状となっています。露を宿す草花は、萩などの花を省き、薄と思われる細長い葉のみを弧線でリズムカルに描いています。腰を曲げて懸命に女を背負うような男の姿勢を改変し、男の背に女がふわりと重なり、二人でひとつの形-角の丸い柔らかな三角形-を成しています。人物の後方には丸みをおびた土坡を三つほど新たに加えています。水流の水平線と呼応するように土坡の底部は水平に表され、この土坡を斜めにずらして配置することによって画面に奥行きが生まれています。大和文華館は益田たき子旧蔵の「八十段衰えたる家」色紙(図3)も所蔵していますが、建物と水流、土坡などの位置関係が曖昧で、モチーフの形状の呼応関係がやや弱いのです。それにくらべると本色紙は、数を絞ったモチーフの形状を心地よく呼応させ、モチーフの配置に意を注いで豊かな空間を作り出すという宗達の得意とした特徴がよく表れており、工房

の弟子ではなく宗達自身が描いた可能性が高いことが窺えます。

続いて同時代の他の絵師の作品とくらべてみます。宗達と同時代には、中世より続く土佐派の系譜の絵師として土佐光吉・光則などが活躍しており、彼らも多くの王朝物語図色紙を制作していました。たとえば京都国立博物館蔵の土佐光吉「源氏物語絵色紙帖」に収められる「空蟬」の色紙(図4)を見ると、建物や畳、調度品の線が並行に配された幾何学的な構図なのですが、多くのモチーフが細やかに描き込まれているため、形状の呼応関係がそれほど印象的ではなく、細密描写に目がひかれます。土佐派の王朝物語図色紙は、『伊勢物語』より『源氏物語』の作例が多く残るのは、物語本文の情報量が圧倒的に多く、様々なモチーフを描き込める『源氏物語』の方が細密描写に優れた土佐派の技量が発揮できるためでもあったでしょう。宗達と同時代に活躍した岩佐又兵衛も、色紙ではなく絵貼屏風などではありますが、王朝物語絵を得意としました。又兵衛の王朝物語絵は、引目鉤鼻で表現される宗達工房や土佐派の王朝物語図色紙とくらべ、目鼻がはっきりと表情が豊かに表されているのが特徴的ですが、又兵衛筆「伊勢物語梓弓図」(個人蔵)に描かれる男(図5)のように、人物の姿勢をふっくらとしたひとかたまりの形状へとデザイン化してとらえる方向性は、本色紙と共鳴する点があります。宗達も又兵衛もやまと絵画題を得意とする新興の工房の主宰者として活躍しており、美意識が重なる一面もあったことが窺えます。

最後に、王朝物語絵の古典とくらべ

てみます。本色紙は宗達工房の伊勢物語図色紙の中でも繊細な目の表現がされており、単純な一本の横線ではなく、線を重ねて眼精の部分にアクセントをつけ、見つめ合う視線が細やかに表されています。こうした目の表現は、平安時代の物語絵の傑作「源氏物語絵巻」(徳川美術館・五島美術館ほか蔵)や「寝覚物語絵巻」(大和文華館蔵)などの古典的な王朝物語絵の表現と類似することが指摘されています。加えて注目したいのが土坡の表現です。底部が水平な類似する形状の土坡を斜めにずらして配することで画面の奥行きを表現する手法は、『寝覚物語絵巻』より少し遅れた頃に制作されたと考えられる和泉市久保惣記念美術館蔵の「伊勢物語絵巻」(図6)に見ることができます。宗達が図様を学んだ古絵巻には、先述した「異本伊勢物語絵巻」のほか、鎌倉時代頃の制作の「北野天神縁起絵巻」や「西行物語絵巻」などがあることが指摘されていますが、これらの宗達が参考にしたことが確実な中世の古絵巻には、こうした目の表現、土坡の表現は見られません。宗達がより古いタイプの王朝物語絵の表現にどのような近づきになったのか、興味がひかれるところです。(宮崎もも)

※図2、図6は『伊勢物語絵巻絵本大成』(角川学芸出版、2007年)、図4はColBase、図5は『岩佐又兵衛展』(福井県立美術館、2016年)より転載いたしました。

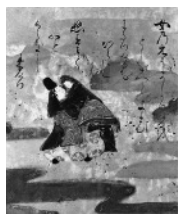


図1



図2



図3



図4



図5

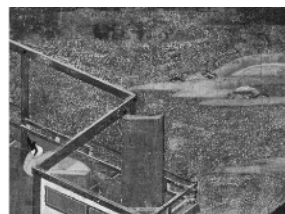


図6

季刊 美のたより No.231

令和7年 7月 11日

発行 大和文華館